

節制というと、なぜ「食欲と性欲」になるのか

近 藤 良 樹

(広島大学名誉教授)

1. 「節制」というと、食と性のそれが想定される

節制と聞くと、おいしい物の過食をまず想像するであろう。さらには、性欲への戒めを思うこともあろう。節制が食欲と性欲の抑制になるのは、古代からそうであった。古代ギリシャのアリストテレス(『ニコマコス倫理学』の節制論)も、中世のトマス・アキナス(『神学大全』の節制論)も、その二つにと節制の対象を限定する。現代でも、おそらく食と性の二つを節制ではまずは想起する。

食でも性でも節するのは、過度になりやすい快楽(への欲求)である。節制は、勇気が恐怖を抑制するように、快楽を抑制する。現代は、快楽に関しては古代や中世とちがい、感性的なものから高度に知的なものまでさまざまな快楽を享受することが可能となっている。快楽といえば食と性、ということでは済まなくなっている(食のおいしさ、食のこの快感情は、「快」とも「快楽」とも普通には言わない。しかし、(食を第一とする)節制はというと「快楽の抑制」になろうから、本稿では、食の快感情を含めて快感情全般を「快楽」と表現する)。近代の「節制運動(temperance movement)」は、禁酒であり、禁煙の運動であった。あるいは、ゲーム・ギャンブルが娯楽産業によって磨きをかけられ、魅された者が過剰にこれにのめり込むようなことにもなっている。

現代の節制は、拡大された快楽享受のもとで拡大された領域をもって定義されるべきであろう。節制とは、「快楽をその目的とする諸欲求(食欲・性欲、さらには、娯楽とか麻薬など)について、これに耽溺して生の健やかさの損なわ

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

れることがないようにと、理性でもってその諸欲求を適正に抑制することである」と言っておけるであろう(cf. 近藤良樹『節制(講義ノート)』 1-1-5. 節制の定義 <http://www.geocities.jp/hiroshimakondo/temp.htm>)。

快樂享受は過剰になりがちだから、それをもたすものが何であれ、これには慎みをもつことが、節制が必要になる。そうでありながら、現代でも何よりも食欲と性欲の節制を思う。現代も、両者が節制対象として際立ち、狭義には節制対象は「食欲と性欲」になるといってもなお言い過ぎでないように感じられる。古代から変わらず今でも食欲と性欲が節制対象の中心になるのは、それ相当の理由がそこにはあるのであろう。以下に、そうなる理由がどこにあるのか探っていくことにしたい。

2. その快樂が過度にも害にもならないものは、節制の必要もない

節制する必要が生じるのは、その快樂享受が過剰になりがちで有害となるからである。であれば、過剰になりにくいもの、害悪がないものならば、快樂であつても、これを節することはないのである。節制の筆頭にあげられる食欲ですら、少食のひとつにおいては、食の節制は無用の話である。通常過剰な快樂享受にならないものは、一般的には節制をいうこともないのである。

(仕事の後のささやかな楽しみとしての娛樂)娛樂は、つい最近まで庶民においては仕事のあとのほんのひと時の、ささやかな息抜きであつた。「将棋が好きで好きで」というひとでも、日々の仕事の合い間の楽しみ程度にとどまっていた。その将棋・ゲームの楽しみは大きかったとしても、この快樂は、仕事に悪影響があるどころか、リフレッシュして仕事に精出すために資するものでもあつたであろう。とすれば、このゲームの快・楽しみは、快樂だといつてもこれを節するようなことはいらなかったはずである。

だが、現代は、娛樂産業があつて、射幸心をそそるゲーム・ギャンブルを開

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

発し、金を注ぎ込ませようと盛んに宣伝して誘惑する。パチンコ店で週日の日中からこれに夢中になって仕事を放り出してその欣喜雀躍の快楽にうつつをぬかすようなことが生じている。その快楽から抜け出せず、これのとりこになって、その健やかな生を台無しにしている。この現代社会の過度で有害な娯楽には、節制が求められることとなる。もちろん、一般の者は、せいぜい休日これを楽しむ程度であり、それを節することは不要であろうが、ごく一部では、ギャンブル依存症になって節制が求められる状態になっている。

仕事のあとの楽しみの娯楽のみでなく、仕事自体も結構楽しいものでありうる。「好きこそものの上手なれ」というが、自分の仕事が楽しくて快適でということは、いくら快適であっても、マイナスになるところか仕事は一層はかどることである。これに制限を加えて節制などする必要はない。

(本来的に過剰の享受になりにくい快楽もある)香り、いいにおいには、ひと魅される。だが、これにのめり込んで生に有害となるようなことはまずないであろう。第一、どんなに魅される香りであっても、食べ物の味の快楽とちがひ、同じ香りには短時間で鼻は利かなくなり、心地よい香りはすぐに消えてしまう。高価な香水をふりまいて贅沢をするような場合は、それが香りを楽しむためであれば快楽のことがらとして、節制をいうことも可能ではあろうが、あるとしてもごくごく特殊なことになろう。

風呂好きは、結構いる。だが、これも、「小原庄助」さんのような例外はあるとしても、一般的には、毎日朝から何時間もはいつて生活に支障をきたすようなことはなかろう。風呂好きで通っているひとでも、仕事を終えて日に一回一二時間ぐらいなものであろう。だが、古代ローマのテルマエとか、現代日本の大きな銭湯は、一日中風呂を楽しみ、他の娯楽も楽しめる仕組みになっている。そういう場合は、これに毎日通っていたのでは問題が出てきそうで、「節制しろ」といわれることがあるかも知れない。

(陶酔も年に一度なら害悪はないであろう)その快樂が強烈でこれにのめり込んで熱中するとしても、年に一二回ということなら、節することなく、大いに快樂享受し楽しんだらいいであろう。かつてのお祭りは、そういうものであった。夏祭り、秋祭りに熱狂的になったとしても、それは、そのときだけに限定されていた。遊びほうけても、それが特別の日のみなら、日常的生には有害ではなかった。仕事に追われ続ける日々の希少の息抜きのも場であった。スポーツにしても芝居にしても、その楽しみは、かつては年にせいぜい何回かであった。だが、現代は、ほぼ毎日、スポーツができ、名プレーを楽しめ、いたる放送局でドラマが流されている。365日そうであれば、「少しは節制しなくては！」といわれることが、まれにはありそうである。

3. 快樂のなかには、節するよりは禁じた方がよいものもある

快樂でも節制の対象にならないものとして、その快樂がささやかで過度にも有害にもならないものがあるが、反対に害悪がはじめてから顕著で、節制では生ぬるくて間に合わないものもあげられよう。つまり、制限するだけでは不十分で、禁止・禁欲するのが本筋になるものは、節制対象とはなりにくい。

(害悪が大きければ禁じなくてはならない)その快樂享受が当人や周囲に大きな害悪をもたらすものであれば、これは、禁じられるべきである。遊びとしての狩猟は、おおきな快樂をもたらす。獲物を追って夢中になる。だが、獲物にされ殺害される方は災難である。無用な殺生は禁止すべきである。あるいは、生に資するものなく専ら快樂にふけるだけの麻薬とかギャンブルもしばしば本人や家族に大きな禍いをもたらす。有害無益の快樂なら、禁じられてしかるべきである。

食の場合は、いくら大きな快樂となり、場合によると過食してしまうとしても、これを完全に断ってしまうことはできない。断食には限界がある。生を維

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

持しようというのであれば、食の欲求を消滅させるわけにはいかない。だが、狩猟趣味とか麻薬・ギャンブルへの欲求は、なくなっても問題はない。害悪が顕著なのであれば、節するより禁じてその欲求を消滅させる方がよい。

(節制では、有害なものへの快樂欲求は存続する)節制は、その快樂への欲求自体は、存続させる。一時は節したとしても、害をもたらす快樂欲求が温存されていては、いずれまた過剰の快樂を求めて、有害状態は反復される。飲酒の場合、節制して飲酒への欲求を温存しつつ、長年その快樂を享受して問題ないひともある。だが、これへの常習が依存症になるひとでは、飲酒を絶つ禁欲が不可避となる。節制とちがひ、禁欲では、多くの場合、欲求自体がなくなっていくから、真にその有害な快樂享受から抜け出していける。麻薬類のみでなく、ギャンブルなどへの依存症でも、それへの依存状態から脱出するには、禁止し禁欲してその欲求自体を消滅させることが必要となる(精神的なストレスの解消をそれに求めているような場合は、精神的な治療も必要となる)。その欲求なしで生の維持に問題がなく、節制では間に合わないのであれば、禁欲し、その快樂享受を絶ち、欲求自体を根絶することが求められる。

(なぜ禁酒・禁煙を「節制運動」と言ったのか)禁止・禁欲より「節制」の表現が好まれるのは、おそらくは、語感の問題がひとつにはあるのであろう。全面否定の禁止運動ではきつい言葉となるから、おだやかに、節することを求める運動にするということである。内実は、その運動は禁酒であり、禁煙であるから、禁止・禁欲なのである。大麻とかアヘンだと、節制ではなく「麻薬禁止」「麻薬撲滅」の運動となることであろう。飲酒・喫煙の場合は(いずれも、厳格にいうと麻薬ではあるが)、それとの対比でいうと、あるいは飲酒・喫煙する者に与しがちに言うと、周囲に迷惑のかからないようにして節しつつ嗜んでほしいということであろうか。

実際に多くの者では飲酒の節制は結構きいていて、その欲求を温存しつつ「休

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

肝日」をもうけたりして、ほどほどの量に自制し、禁酒ではなく節酒して長年飲酒を楽しんでいるのである。喫煙も同様であろう。禁煙・禁酒ではなく、節煙・節酒である。しかし、アル中、麻薬中毒になった場合は、節制の奇麗事ではすまない。そのことは当人も周囲のものも十分に知っている。禁欲して欲求自体を撲滅する以外にその害悪をふせぐことは困難である。依存症からの脱出は、節制では無理で、禁欲し、これを絶ってその欲求自体を消滅させるのが王道である。

(依存症では、快楽より(不安など)不快に駆り立てられる)麻薬の依存症の場合、快楽よりも、禁断症状の苦しみがこれの摂取へと駆り立てる。喫煙の常習者は、タバコの快楽よりも、吸えない状態でのいらいら・不快感に駆り立てられるのである。喫煙自体はそんなに快楽というほどのものではない。きれたとき一服吸う、その禁断症状の解消の安堵感が一番の快楽である。不快が駆り立てるのは、生理的欲求では排泄や呼吸がそうである。これらは快楽を目的としないから節制には無縁である。中毒・依存症は、快楽より不快(禁断症状)がことを進める点からいうと、快楽抑制の節制とは、ずれることになる。

4. 生に必須のものは、全面的な禁欲・禁止はできない

節制するまでもない些細な快楽はもちろん、大きな快楽であっても、禁じた方がよいものは、節制対象にふさわしくない。その快楽享受の過度が有害になり、かつ生にとって不可欠・必須で全面的には禁止することのできないものが、つまり禁欲ではなく、制限し節する以外ないものが、狭義には節制対象となる。必須の欲求は、制限しても禁じることはできない。どんな欲求をめぐっても、快不快が伴うから、どの必須の欲求においても快楽の節制が一応想定できる。だが、多くの必須の欲求では、快楽といってもささやかなものにとどまる。

(生に必須でも高次層の欲求では、その快楽は些事である)生の高次層の精神

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

的な欲求としての希望は、ひとの生には、欠く事ができないものであろうが、この希望をいだくとき、これを達成したとき、快である。あるいは、万人の求める幸福は、その感情は精神的な快楽である。だが、これらは、快がともなうとしてもささやかで、時には、幸福と自覚しても、希望を達成しても、快がともなわないこともある。希望や幸福というひとの生に必須であろう大きな欲求の充足であっても、生じる快楽はささやかだから、これを節することは無用であらう。知的精神的な欲求では、目的になるのは、おのおのの価値物である。快楽はその獲得・成就にともなう些事である(知的でも娯楽は、快楽を目的にする。但し、生に必須のものではない)。

高位層の生の欲求の場合、快が駆り立てることはほとんどないが、その不快は、ことをすすめるに大きな力となる。絶望とか不安は、知的精神の不快感情の代表であらうが、ひとをこの不快感情回避へと駆り立てていく。ときには、命を捨てても絶望感から解放されたいと思いつめることもある。絶望とか不安の不快感情については、これを抑制し冷静になって対応することが必要となる。だが、これは、快楽欲求の抑制、節制とは無関係なことである。

(生理的欲求では、不快で動く場合と、快楽で動く場合がある)生の基礎層の必須の生理的欲求では、快不快の感性的感情によって動かされるところが大きい。生理的な欲求のうち呼吸・睡眠・排泄は、いまある不快によって急き立てられる。食と性は、まだない快楽に引かれ駆り立てられる。呼吸などは、現に呼吸していても自律的であって、通常は欲求にはならない。欲求になるのは、火急のときで、苦痛・不快をもってこれを意識する。呼吸も排泄もその不快(息ができず苦しいとか、切迫する便意・尿意)が欲求自体を作り出し、この不快が欲求充足へと駆り立て、それを充たして、ほっと快感を得る。

生理的欲求のうち快を積極的に求めてこれを展開するのは、食と性である。つまり、節制(快楽の抑制)をすべきものは、必須の生理的欲求のうちでは、食

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

欲と性欲ということになる。睡眠欲は、排泄欲求と同じく不快がかりたてその充足で安楽となるが、「惰眠をむさぼる」というように、睡眠の快楽がひとを魅する面がある。食や性とその点では似ている(貝原益軒『養生訓』(巻第一)は、食・性・睡眠を「三慾」とし、慎み節すべき対象とする)。だが、食・性の欲求と大きく異なるところがある。食・性のように覚醒した意志による自由な制御は、睡眠中はできないことである。

(自由度で食と性は際立つ)節制するには、その欲求を自由に意識が制御できる必要がある。欲求では、不足があつて、これを充足しようと思ふ。もし、不足が即充足される場合は、欲求することは無用で、欲求は成立しない。呼吸は、ふだんは欲求ではない。即充足されているからである。欲求となるのは、息ができないで苦しくなったときである。不充足から充足へと意思が関与して欲求を実現するのであり、どの欲求も一応、意思をもって制御することになる。意思は欲求実現へと意欲するのだが、意思を逆にもって欲求実現の阻止もできる。抑制する自由をもつ。排泄や呼吸でも一応中断の自由をもっている。

生理的欲求のうち、意志が自由にできる度合いということでは、睡眠がおそらく一番、自由がききににくい。排泄では、トイレが近くにない場合、相当の間、意志をもって我慢しておくことができる。呼吸も場合によっては気を失うまで意志を働かせて我慢できる。睡眠も睡魔と戦うことができるが、一旦睡眠に入ると意識がなくなり、覚醒するまで意志は働きようがなくなる。これらに比して、食と性は、格段に大きな自由をもつ。意志をもって自在に欲求を制御できる。食事中でも他に用が出てくればこれを即中断でき、かつ再開もできる。

5. 快楽を目的にし、意志が自由にできる食欲と性欲

(外の遠くのことを意識した欲求)自由という点で、ほかの生理的欲求にはなくて、食と性のみにある節制にとって決定的な自由がある。それは、食と性は、

外部の遠方に対象を求めるので、そのときの対象の選択、ことの推進・変更・中止等の自由をもつことである。食では、食事中にケーキを食べるのを自由に中断できるのみではなく、ケーキを過食する傾向があるのなら、これを購入せず手元におかないとか別の類似のものに変える等の自由をもつ。食と性では、欲求充足時の制御の自由のみでなく、充足準備段階の意識的に制御された諸過程での自由をも持つのである。

食と性の欲求は、外部も遠くにあるものの獲得欲求であり、意識の介在をもって種々の工夫を行う。外部のものの摂取といっても呼吸では呼吸しようという意識は無用である。だが、食も性もその実現には、意識をもって意欲することが必要である。欲求充足、快楽享受に到るためには、意欲をもってこれと取り組まねばならない。食・性の欲求を充足するときの促進・中断の自由をもつとともに、それとは別の、外の遠方にある対象に近づくかどうかという自由もつのである。ここでの自由は、好き勝手できるだけの、自然的束縛からの(受動からの一時的な)自由ではない。いつ、どこで、何を食べようかということからはじめて、自律的に自分がお膳立てしていかないと食欲の充足はならないのであり、それは、(能動的な)自己立法の自律の自由になると言うことができる。

(食と性は、文化を形成する人間的なもの)外部のものを摂取するといっても、呼吸は、概ね自律神経で行い、随意でするのは、切羽詰ったときのみである。これに対して、外の遠方のものを求める食と性では、容易には欲求充足はならず、様々な工夫をひとは行う。食については、食物を生産することからはじめて消費活動でも料理するなどの手を加えて優れた食べ物を確保していく。そこには、人類の英知が結晶している。ほぼ動物と同じ呼吸・排泄・睡眠とはまるで異なった、高度に人間な営みとなっている。食欲を充たす直近の消費行動でも、多彩な食べ物を自在に選択してその摂取量も栄養価を踏まえるなどして意

のままに制御することができる。

性欲も食と同様、その欲求実現には、呼吸や排泄とはちがい遠くの異性をひきつける努力が必要となる。動物でも、他の同性との競争になるから、より魅力的にと工夫をこらす。ひとの性愛は、美や諸種的能力をみがき、華やかな文化を生み出している。性的結合は、家族を形成する根本になるから、それにふさわしい秩序をもつことも社会から要請される。そのなかで、各人は、結婚しない自由をもふくめた自律的自由のもと、秩序ある形で性的欲求も満たしていくようになっている。

(快楽が、主観的目的になり、客観的目的達成への餌・褒美となる)生理的欲求は、快不快をもってすすめられるが、快楽が圧倒的な推進力になるのは、食と性だけである。呼吸など呼吸困難の不快があつてのみ欲求となる。その充足には安堵の快楽がともなうが、この快楽は呼吸の目的にはならない。しかし、食と性は、快楽を大きな主観的目的にする。呼吸や排泄の場合、そこに生じる不快が欲求を作り出し不快解消へと向かわせるように、食と性は、快楽が主観の動機・目的となり、未来の快楽が餌となり褒美となって、その快楽実現へとおのれを駆り立てていく。不快も空腹感がこれを食へと向けるが、実際に摂食する段になると、美味しさの快楽がこれをすすめる。

食と性では、遠方にあるものを獲得する努力が必要である。食べようという意欲がない場合、摂食はできない仕組みである。呼吸ならこれをしようと思わなくても通常は自律的(不随意)に実現している。だが、食と性の場合、そうしようという意思をもたない限り、その欲求実現はおぼつかない。その意欲や努力を大きくできるのは、快楽である。快楽のえさがひとを困難な食と性の欲求実現(客観的目的の栄養摂取と受精)へと最後まで駆り立てていく。快楽は、最後に褒美として出される。その快楽を感じるものが大きいものほど、強く欲求実現へとおのれをかけることになる。性の場合は、とくに、性的快楽をもたな

いものは、異性との交わりに向かうことすらない。子孫を残すのは強い快楽を性的欲求実現において抱ける者になる。その淘汰は、性的快楽を強く感じる者を残したことであろう。食も似た事情であり、美味を強く感じて食欲旺盛なものが適者として生存したことであろう。

(快楽の過剰享受になりがちな現代社会)食欲と性欲は、外部の遠くにその対象をもつから、欲求充足のための様々な過程を自らの意志・意欲をもってたどっていく必要がある。古い時代には、それは、困難なことがらであった。人類が地の果てまで難難辛苦の大移動をしていったのは、なんといっても食欲を充たすためだった。飢餓に苦しみ、子孫を残すこともままならなかった。

だが、近年は、恵まれた社会・自然のもと、食の快楽も性の快楽も過剰の享受になりがちである。快楽に目のない人類のこと、食の快楽・美味の追求では、英知を傾け続け、大量消費の食文化の現代となっていることである。社会の豊かさから疎外されたホームレスですらも、(かつてなら早晩餓死していたであろうに)いまは肥満気味である。呼吸とか排泄とちがいが、食と性は、自由度が大きくその充足は意識・意欲しだいである。高度の文明社会のもとでは、求めれば過剰な快楽の享受はだれにでも可能である。食は肥満をもたらしがちである。性は、「小人閑居して不善をなす」が可能な社会となり、逸脱に誘われて、家庭の不和・崩壊、したがって類的生の持続を阻害するようなことも生じている。快楽享受を慎み節制することが一層必要となっている。

(必須の快楽欲求で、自由の効くもの)禁じることでできない必須の欲求で、かつ快楽がこれをリードしているものは、その快楽享受が過度になって有害な状態になるところからは、これを抑制し慎むことが、節制が求められる。ただし、それには、その欲求が意志の自由のもとにあって、意志による抑制が可能でなくてはならない。

食と性の生理的欲求は、快楽を求める必須の欲求になるが、両方とも意識し

意志・意欲してのみ展開されるものとして、十分に節する意志が介在可能である。その充足に強い快楽があり、格段に大きな制御の自由のある食と性の欲求は、節制の典型的な対象になるということができる。

6. かけ離れた食欲と性欲が、どうして一つの徳目に納まるのか

食欲と性欲は、節制(快楽享受の抑制)対象の二横綱であるが、両者は、そのあり方がまったく異なる。節制という一つの徳目に納められているけれども、その結びつきは、両者の相違ほどには明確でない。

(食と性は、それら自体は、異質でかけ離れている)食欲と性欲では、それ自体のあり方がまるでちがう。食の快楽は、「おいしい」という。だが、性的快楽は、他の快楽と同じように「きもちいい」「こちょい」であり、「おいしい」とはいわない。食は、個体の維持に毎日必要で生まれてから死ぬまで消えるものではないが、性欲は、個体には維持どころか犠牲を強いるものであり、こどもには無縁だし、性的挑発のないところでは消失もする。

倫理的抑制のあり方も食と性では、まるで異なる。食の場合、美味のものの過食を節しほどほどに制限することで、節制でぴったりである。だが、性的節制では、不倫などの場合、節するのではなく「禁止」「厳禁」であろう。節制よりも禁欲であり、徳目としては誠実とか忠実、貞節、貞操、純潔などという方がよりの確なものとなろう。食には、それらは一切あてはまらない。

(アリストテレスらの試みには、難があった)異質の食と性を一つの節制でいうことは、古くから気がかりだったのではないかと思われる。アリストテレス(『ニコマコス倫理学』の節制論)は、両者のみが節制対象になるといい、その共通特性を「触覚(haphē) (1118a31)の快楽となることに求めている(食も、のど越しの触覚の快楽とみた)。だが、かれは、節制対象にならない触覚の快楽のマッサージや入浴をあげて、触覚への還元に難のあることにも触れる

(cf.1118b5-8)。トマス・アキナス(『神学大全』の節制論)は、食は個体保存になり、性は類の保存になると、「生保存(*conservatio vitae*)」の共通性において節制を食と性の二つに限定している(cf. II-II, q.141, a.5.)。だが、個体保存は、呼吸とか排泄もそうだろうし、恐怖とか勇気も生を保存するものであろうから、食と性だけを生保存でまとめるのは問題であった。おそらく、他を排除して食と性のみを一つにするような対象自体の共通性ではなく、これに関わる主体の構え方の同一性を見ることができるだけなのではないか。現代の節制では、麻薬やギャンブルの快楽も考慮すべきであるから、対象において共通性を見出すことは一層困難なこととなっている。

(快楽・意志自由・必須のもの)食欲・性欲は、それら自体は、そうとうに異なった欲求である。だが、圧倒的な快楽をそれを感じることに、それへのひとによる制御・抑制の自由のあることに注目すれば、食と性には、ひとは同じ構えをもつのである。両方ともに、同じく快楽享受とそれへの制御、節制ということになる。「果物」の概念形成と似ている。これは、対象の同一性によっているのではなく、ひとの同一の扱い・構え方によってなる。西瓜と栗ではまるでその客観的な性質は異なるが、同じ果物である。西瓜、胡瓜、烏瓜は、瓜類だが、西瓜以外は果物ではない。主体の対応の共通性によって果物となる。これと同様で、食欲と性欲が節制対象としてひとつになるのは、両欲求自体が似ているとか同じだからではなく、それらに対してひとが同じ対応、同じ扱いをすることによるのであろう。つい引かれてしまう快楽であり、同じように抑制し我慢もできるという点で同一の節制の対象となるのであろう(大きな快楽の麻薬やギャンブルなども、同様であるから、当然、これらも節制の対象に入ろう。ただし、これらは、害悪が顕著だから、節するよりは禁じるべきものである。狭義の節制対象には、禁じることのできない必須の欲求である食欲と性欲が残ることになる)。

(**快楽の(感覚)器官は、食と性のみにある**)ひとの生に必須の欲求でその快楽が大きいのは、おそらく、食欲と性欲だけである。その快楽内容は「おいしい」と「きもちいい」であってまるで違うのではあるが(ちょうど、西瓜と栗が、まるでちがった味でありつつ、ひとを魅する同じ「果物」となるように)、同じように魅されて過度の快楽享受になりがちである。快楽の器官とでもいう快楽感受の身体的部位が際立つのは、この二つである。食の快楽は、のど越しにある。味覚と触覚をもつ喉を通過するところに、その部位において快楽がなる。性欲も受精のための生殖器が快楽の部位ということになろう。ほかの生理的欲求は、不快を避けることが中心で快楽は不快の消滅によってなる程度であり、ここが快楽の感覚的な部位というようなものはない。

ひとを喜ばせるための接待には、食と性が古来、効果抜群なものとして使われてきた。食べ物であれば、まちがいなくみんなに喜ばれる。いまでも贈答品といえば、食べ物であろう。美味しいものには、みんなが魅される。性的供応も、古くから繰返されてきた。売春を犯罪とする現代社会ですら、性接待がいはれる。食と性の快楽は大きく、節すべき快楽の代表になる。

(**日頃の楽しみは、食と性の快楽だった**)刑務所に入った者が、市民としての欲求を遮断されて気にすることに食と性がある。その回顧録の類いをみると、大体が、所内での楽しみに(あるいは夢見るものに)、食をあげる。かつ、性的なものは、許されていないが、それも気になるようで、これを記載し、多くは、性欲はなくなったという。

旅行も日常の諸欲求を中断させる。旅行中は、必須の断ち切れないものが残り、開放されるものが顔をだす。十返舎一九の『膝栗毛』(東海道、宮島参詣、木曾街道等の珍道中記)をみると、泊まる宿場・旅館を街道沿いに選ぶとき、どこに行っても、「やじさん、きたさん」は、美味しい食事と、いい女と遊べることに引かれている(いい酒も、昼間からしばしば求めている。酒は食に含

節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか

めることがあるが(先にあげたアリストテレスやトマスもそうしている)、麻薬(酩酊の快楽)であり、必須のものでもなく、害悪が生じるようなら、厳しくは節制よりは禁欲の対象となろう)。食と性は、快楽内容はまったく別だが、魅了される単純明快な快楽ということで、万人が両者を楽しみとできた。

強い快楽をもつ食と性の二つの欲求であるが、これにのめりこみ逸脱しそうなときには、それを抑制することが可能でもある。快楽享受を前にしての同じ節制になる。旅行中であれ、日常の中であれ、日々の第一の関心事は食であろうが、さらには魅力的な異性に、性的逸脱への妄想をいだくこともあろう。そこで逸脱の抑止をうながすものは、家族への誠実・忠実とか貞節などの徳目であることもあれば、名誉・金銭とか性病への恐怖等のこともあろう。しかし、なによりも、そこで火急の問題になるのは、わきあがる性的欲望で、この欲望をまずは鎮めることが直近の課題となろう。それを抑制するのは、目の前のご馳走への欲求を抑制するのと同じであり、生起した性的欲求を抑制すること、節制である。あるいはそれ以前に、そういう性的逸脱に誘われる状況をつくらないように慎むこともあろう。それは、過食回避に食品購入を抑制するのと同じで、意志による制御であり、節制である。

「やじさん、きたさん」ならずとも元気な者は、常々、食と性への強い欲求をもつ。日々、食の快楽欲求とならんで、性の快楽欲求が顔を出し、これらを抑制しようとする節制の意識が登場する。禁止できない必須の欲求で、魅する快楽と制御の自由とを具備する食欲と性欲は、節制の二大対象(あるいは狭義の節制対象)として、いまでも健在だといえるのではないか。

Why Are the Targets of Temperance “Appetite and Sexual Desire”?

Yoshiki KONDO

Temperance controls an excess of pleasure. In modern society, the targets of temperance are vices such as drinking, smoking, drug addiction, and gambling. In general, temperance is related to many sorts of pleasure. However, fundamentally, the targets of temperance are “appetite and sexual desire,” as in the works of Aristotle or Thomas Aquinas (who did not encounter smoking, drug addiction, or harmful gambling in its modern form). Why are the targets of temperance limited just to these two desires?

Temperance restrains pleasures. However, if a pleasure is only small and is harmless, it does not require restraining, and if a desire for pleasure is very harmful and unnecessary for life, it should be forbidden rather than restrained. Worthless desires, such as addictions to drugs or gambling, should be controlled by being banned, not by temperance. What should be controlled surely by temperance, is the desire which is necessary for life, has a strong pleasure and includes possibility to be controlled. I think that these criteria are met only by appetite and sexual desire. They can both give great pleasure—of all physiological desires, only these use particular physical sensory organs to give pleasure—and these two desires can be stopped or promoted by the rational will of the individual. Thus, fundamentally, the targets of temperance are only appetite and sexual desire.